

かえるの王さま

DER FROSCHKONIG ODER DER EISERNE HEINRICH

グリム兄弟 Bruder Grimm

楠山正雄訳

-----  
【テキスト中に現れる記号について】

《 》：ルビ

(例) 約束やくそく

—：ルビの付く文字列の始まりを特定する記号

(例) 八一とち頭だて

「#」：入力者注 主に外字の注記や傍点の位置の指定

(例) 「#ここから4字下げ」

〔 〕：アクセント分解された欧文をかこむ

(例) 【DER FROSCHKO:NIG ODER DER EISERNE HEINRICH】

アクセント分解についての詳細は下記URLを参照してください

[http://aozora.gr.jp/accent\\_separation.html](http://aozora.gr.jp/accent_separation.html)

-----

むかしむかし、たれのどんなのぞみでも、おもうようになつたときのことでございます。

あるところに、ひとりの王さまがありました。その王さまには、うつくしいおひめさまが、たくさんありました。そのなかでも、いちばん下のおひめさまは、それはそれはうつくしい方で、世の中のことは、なんでも、見て知っていらっしやるお日さまでさえ、まいにちてらしてみても、そのたんびにびっくりなさるほどでした。

さて、この王さまのお城のちかくに、こんもりふかくしげった森があつて、その森のなかに一本あるふるいぼだいじゅの木の下に、きれいな泉が、こんこんとふきだしていました。あつい夏の日ざかりに、おひめさまは、よくその森へ出かけて行って、泉のそばにこしをおろしてやすみました。そして、たいくつすると、金のまりを出して、それをたかくなげては、手でうけとったりして、それをなによりおもしろいあそびにしていました。

ある日、おひめさまは、この森にきて、いつものようにすきなまりなげをして、あそんでいるうち、ついまりが手からそれておちて、泉のなかへころころ、ころげこんでしまいました。おひめさまはびっくりして、そのまりのゆくえをながめていましたが、まりは水のなかにしずんだまま、わからなくなっていました。泉はとてもふかくて、のぞいてもものぞいても、底はみえません。

おひめさまは、かなしくなつて泣きだしました。するうちに、だんだん大きな声になつて、おんおん泣きつづけるうち、じぶんでじぶんをどうしていいか、わからなくなつてしまいました。

おひめさまが、そんなふう泣きかなしんでいますと、どこからか、こうおひめさまによびかける声がしました。

「おひめさま。どうなすつたの、おひめさま。そんなに泣くと、石だつて、おかわいそうだと泣きますよ。」

おや、とおもつて、おひめさまは、声のするほうをみまわしました。そこに、一ぴきのかえるが、ぶよぶよふくれて、いやらしいあたまを水のなかからつきだして、こちらをみていました。

「ああ、水のなかのぬるぬるぴっちゃりさん、おまえだったの、いま、なにかいったのは。」と、おひめさまは、なみだをふきながらいいました。「あたしの泣いているのはね、金のまりを泉のなかにおとしてしまったからよ。」

「もう泣かないでいらつしやい。わたしがいいようにしてあげますからね。」

「じゃあ、まりをみつけてくれるつていうの。」  
「ええ、みつけてあげましょう。でも、まりをみつけて来てあげたら、なにをおれいにくださいますか。」

「かわいいかえるさん。」と、おひめさまはいいました。「おまえのほしいものなら、なんでもあげてよ。あたしのきているきものも、光るしんじゆでも、きれいな宝石ほうせきでも、それから金のかんむりでも。」

「いいえ、わたしはそんなものがほしくはないのです。けれど、もしかあなたがわたしをかわいがってくださいつて、わたしをいつもおともだちにして、あなたのテーブルのわきにすわらせてくださつて、あなたの金のお皿から、なんでもたべて、あなたのちいさいおさかずきで、お酒をのましていただいて、よるになったら、あなたのかわいらしいお床とこのそばで、ねむつてよいとおっしゃるなら、わたしは水のなかから、金のまりをみつけてきてあげましょう。」と、か

えるはいいました。

「ええ、いいわ、いいわ。金のまりをとってきてくれさえすれば、おまえのいうとおり、なんでもやくそくしてあげるわ。」と、おひめさまはこたえました。そういいながら、心の中では、（かえるのくせに、にんげんのなかま入りしようなんて、ほんとうにずうずうしい、おばかさんだわ）と、おもっていました。

かえるは、でも、約束やくそくのとおり、水のなかにもぐって行きました。しばらくすると、ちゃんと金のまりを口にくわえて、ぴよこんとうかび上がってきました。そして、

「さあ、ひろってきましたよ。」

そういつて、草のなかにまりをおきました。ところが、おひめさまは、そのまりをつかむなり、ありがとうともいわず、とんでかえって行きました。

かえるは大声をあげて、

「まってください、まってください。」といいました。「わたしもいっしょにつれてって。わたしはそんなにかけられない。」

けれど、かえるが、うしろでいくらぎゃあ、ぎゃあ、大きな声でわめいたって、なんのたしにもなりません。おひめさまは、てんでそんなものは耳にもはいらぬのか、とツツとうちのほうへかけだして行ってしまつて、かえるのことなんか、きれいにわすれていました。

かえるは、しかたがないので、すごすご、もとの泉のなかへもぐって行きました。

そのあくる日のことでした。

おひめさまが、王さまや、のこらずのこけらい衆ウラシといっしょに、食事のテーブルにむかって、金のお皿でごちそうをたべていますと、そとでたれかが、びっちゃり、びっちゃり、大理石のかいだんを上がってくる音がしました。そして、上まで上がってしまつと、戸をとんとたたいて、

「王さまのおひめさま、いちばん下のおむすめご、どうぞこの戸をあけてください。」という声がしました。

おひめさまは立ち上がって行って、たれかしらみようとおもつて、戸をあけますと、そこに、きのうのかえるが、ぺっちゃりすわっていました。

おひめさまは、ぎよつとして、ばたんと戸をしめるなり、知らん顔で席にもどりました。でも心配で心配でたまりません。おひめさまが胸をときどきさせているのを、王さまはちゃんと見ておいでで、「ひいさん、なにをびくびくしておいでだい。戸のそとに、大入道おおにゅうどうの鬼が来て、おまえをさらって行こうとでもしているのかい。」とたずねました。

「あら、ちがうの。」と、おひめさまはこたえました。「大入道の鬼なんかじゃないわ。でも、きみのわるいかえるが来て。」

「そのかえるが、おまいにどうしようというのだね。」

「あの、おとうさま、それはこういうわけなのよ。あたし、きのう、いつもの森の泉のところであそんでいましたらね、金もまりが水のなかにころげおちました。それであたしが泣いていると、かえるが

出てきて、まりをとつてくれましたの。それから、かえるがしつこくたのむもんだから、じゃあお友だちにしてあげるって、あたしにかえるに約束やくそくしてしまいました。まさか、かえるが水のなかから、のこのこやってこようとは、おもわなかったんですもの。それが、あのとおりやって来て、なかへ入れてくれっていうんですもの。」

そのとき、またろうかの戸をとんとたたたく音がしました。そうして、大きな声でよびました。

「#ここから4字下げ」

いちばん下の おひめさま、  
あけてください たのみます。

つめたい泉の わくそばで、  
きのう やくそく したことを、

あなたは おぼえて いるでしょう。

いちばん下の おひめさま、  
あけてください たのみます。

「#ここで字下げ終わり」

すると王さまはいいました。

「それはおまえがいけないね。いちどやくそくしたことは、きつとそのとおりしなければなりません。さあ、はやく行って、あけておやり。」

おひめさまはしぶしぶ立って、戸をあけました。とたんに、かえるはぴょこんととびこんで来て、それから、おひめさまのあとについて、ひよこひよこ、いすの所までやってきました。

かえるは、そこにしゃがみこんで、上をみながら、

「わたしも、そのいすに上げてください。」といいました。おひめさまがもじもじしていると、おとうさまがまた、かえるのいうとおりしておやりといいました。

おひめさまはしかたなく、かえるをいすにのせてやりました。するとかえるがまたいいました。

「どうぞ、わたしを、テーブルの上ののせてください。」

おひめさまが、かえるをテーブルにのせてやると、こんどは、

「さあ、その金のお皿をずっとわたしのほうによせてください。そうするとふたりいっしょにたべられるから。」といいました。

おひめさまは、かえるのいうとおりしてやりました。ほんとに、かえるが、ぴちゃぴちゃ、さもおいしそうに舌づつみうってたべているそばで、おひめさまは、ひとくちひとくち、のどにつかえるようでした。

かえるはたべるだけたべると、おなかをまえへつきだして、

「ああ、おなかのはって、ねむくなった。おひめさま、さあ、わたしをあなたのおへやにつれて行ってください。かわいらしい、あなたのきぬのお床とこのなかで、わたしはゆっくりねむりたい。」

おひめさまは、もうがまんができなくなって、しくしく泣きだしてしまいました。ほんとに、ぬるぬる、ぴちゃぴちゃ、さわるのもきみのわるいかえるが、おひめさまのきれいなお床とこのなかで、ねむりたいなんていうのですもの、おひめさまがかなしくなるのもむりはありません。

するとまた王さまが、

「泣くことがあるか。たれでも、こまっているとき、たすけてくれ

たものに、あとで知らん顔するのは、いけないことだよ。」といいました。

おひめさまは、さもきみわるそうに、指のさきでそつとかえるをつまみあげて、上のおへやまでもって行くと、そつと隅すみっこにおきました。そうして、じぶんだけが、お床にはいつてしまいました。

ところが、かえるは、さっそく、のこのこはいだしてきて、

「ああくたびれた、くたびれた。はやくゆっくりねむりたい。さあ、そこへ上げてください。でないと、おとうさまにいつけるから。」  
 といいました。

これでおひめさまは、すっかり腹が立ちました。そこでいきなりかえるをつかみ上げて、ありったけのちからで、したたか、壁かべにたたきつけました。

「さあ、これでたんとらくにねむるがいい。ほんとにいやなかえらつたらないよ。」

ところで、どうでしょう。かえるは、ゆかの上にころげたとたん、もうかえるではなくなって、世にもうつくしいやさしい目をした王子にかわっていました。

さて、この王子が、おひめさまのおとうさまのおぼしめしで、おひめさまのお友だちでも、おむこさまであることになりました。そのとき、王子はあらためて、じぶんの身の上の話をして、あるわるい魔法まほうつかいの女のためにのろわれて、みにくいかえるの姿にかえられたが、それを泉のなかからたすけだして、もとのにんげんにかえしてくれるものは、この王さまのおひめさまのほかになかったといいました。それで、あしたはもうさっそく、ふたりつれだって、じぶんの国にかえって行くつもりだともいいました。



それでふたりはゆっくりやすみました。そして、あくる朝、お日さまがにこにこ、ふたりをお起しになるじぶん、八頭だての白馬をつけた馬車が、はいつて来ました。どの馬も、あたまに白いだちようのはねをかぶって、金のくさをひきずっていました。馬車のうしろには、わかい王さまのごけらいが、しゃんと立っていました。これが忠義もののハインリヒでありました。

忠義もののハインリヒは、鉄のたが「#「たが」に傍点」を三本も胸にまきつけていました。それは、ご主君がかえるにされてしまったので、かなしくてかなしくて、いまにも胸がはれつしそうになったので、やっとたがをはめて、おさえていたのです。たいせつな王さまが、もとの姿にかえたので、きょうさつそく、八頭だての馬車が、おむかえにきたのです。忠義もののハインリヒは、おふたりを馬車のなかに入れてあげて、じぶんはまた馬車のうしろにしゃんと立ちながら、ご主君のまた世に出たことをおもって、ぞくぞくするほどうれしくてなりませんでした。

さて馬車がすこしはしりだしたとおもうころ、王さまのお耳のうしろで、ぱちり、ぱちり、なにかはじける音がしました。わかい王さまはそのとき、うしろをふりかえっていいました。

「#ここから4字下げ」

「ハインリヒ、馬車がこわれるぞ。」

「いいえ、いいえ お殿さま、

あれは馬車では、ござんせぬ。

せつしゃのむねに はめたたが「#「たが」に傍点」。

殿さま、げえる「#「げえる」に傍点」にならしゃって、

ぎゃあぎゃあ、泉でなかしやるで、

はりさけそうな このむねを、

むりにおさえた そのたが「#「たが」に傍点」が。」

「#ここで字下げ終わり」

それでも、ぱちり、ぱちり、また二どもはじける音がしました。

わかい王さまは、そのたんびに馬車がこわれるのではないかとおもいました。けれども、それはやはり、ご主君がにんげんにかえって、たのしい日をおくられることになったので、ふさがっていたハインリヒのむねが、ひらけたため、胸のたが「#「たが」に傍点」がはれつして、とびちる音でございました。

底本：「世界おとぎ文庫（グリム篇）森の小人」小峰書店

1949（昭和24）年2月20日初版発行

1949（昭和24）年12月30日4版発行

原題の「〔DER FROSCHKO: NIG ODER DER EISERNE HEINRICH〕」は、  
ファイル冒頭ではアクセント符号を略し、「DER FROSCHKONIG ODER  
DER EISERNE HEINRICH」としました。

「旧字、旧仮名で書かれた作品を、現代表記にあらためる際の作業指針」に基づいて、底本の表記をあらためました。

入力：大久保ゆう

校正：浅原庸子

2004年4月29日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。